



Title	第一コリント十三章の研究
Author(s)	和田, 博文
Citation	基督教学, 19, 24-27
Issue Date	1984-08-27
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/46430
Type	journal article
File Information	19_24-27.pdf



第一コリント十三章の研究

和田 博文

序

コリント前書十三章は「愛の讃歌」として有名であるが、研究発表のテーマとして聖書のこの個所を選んだのは、ある律法学者の質問に対し、イエスが第一のいましめとして神への愛、第二のいましめとして人への愛を言われた（マタ二二・三四―四〇、マル一二・二八―三一、ルカ一〇・二五―二八）からである。また、愛に時代を越えた永遠的な価値、平時・戦時を問わざる永遠的な価値を認めるが故である。また特に現代的価値として、核兵器と性の退廃により祖国と人類が減じようとしている時、コリント前書十三章の教える「愛」こそこれらの問題を解決し、祖国と人類を救うものと思ったからである。

一、テキスト・クリティーク

テキストについては大して問題ないと考えた。原文は

The New English Bible のテキストにちれた R. V. G. Tasher 編の The Greek New Testament の第一コリント十三章を用いた。次の二個所につき検討する。

(一) 三節で *ἵνα καυχώμεθα* (“that I should be *bu-ned*”) を取り *ἵνα καυχώμεθα* (“that I may glory”) を取らなかった。後者「誇るために」を採用しているのはネストレ版（第二十六版）と連合聖書協会版（第三版）があるが「焼かれんために」を採用したのである。

(二) 十三節で *τὰ τῶα … ἀγάπῃ* において、ネストレと連合聖書協会のギリシヤ語本文は *ῥώτις … τῶα* と、*τὰ τῶα τῶα* と *ῥώτις, ἐῖς, ἀγάπῃ* の位置を換えて読むが、タスカーに従ったのである。

二、語句の意味の説明

この章の語句で説明を要すると思われるものを二つ程左に上げる。

(一) 一節の *ταῦς ἰδέομαι* の意味は、「異言で」とする。この語の十二章―十四章の用法から異言の意に解した。「人間の諸言語」と解するのは、日本聖書協会の口語訳、最近の前田訳、The New English Bible などであり、「異言」ととっているのは、岩隈氏（希和対訳脚註

つき新約聖書、コリント人への手紙上、山本書店)、共同訳である。十二章十節には *révélations* 「異言(複数)」の種類(複数)」とあり、初代教会の時代には異言に種類があるように考えられていたらしい。それで「人間や天使の異言で語り」と解したい。「人間の諸言語」という解し方については、釈義上、パウロ書簡・他の文書における愛の個所、福音書のイエスの愛の教え、更に聖書全体から考えた愛の価値からして、人間のいろんな言葉を語っても愛がなければ意味がない、ということを含めて解したい。

(二) 十二節の *ôl (=ôlô) êdôttou* 「鏡によって」であるが、昔の鏡は金属板を磨いたものであったらしく、今日の鏡のように明瞭でなく、はつきり映らなかったらしい。

三、第一コリント十三章の意義

(一) 愛はいかにして可能であるか。コリント前書十三章の愛を可能にするものとして、最近筆者の目にとまったものを示す。量義治(埼玉大教授)が「内村の贖罪論はいわゆる神学的思弁ではなくて聖霊による実験の現象学的記述なのであります。ここに内村の贖罪論の比類なき厳密さがあります。実は真の意味における神学的厳密

さとは前提された教義との整合性という觀念の問題ではなくて、神の現実に関わる事柄なのであります……。十字架は聖霊によって罪の審きと赦しの十字架として現実なのであります。十字架の言葉と聖霊は不可分なのであります。まことに聖霊はわれわれにおいて十字架を現実化するのであります。」(千代田無教会集会付属の雑誌「おとずれ」四八号、五〇六頁「マルコによる福音書第三章二〇節と三章五節―関根正雄先生の日曜集会の前講(一九八二・六・二〇)に基づく」の文章より引用)と内村の「聖書之研究」を引用して言っているが、内村のごとき贖罪の実験、新生、回心の実験を通して始めて、コリン前書ト十三章の愛が可能になると思う。

(二) 第一コリント十三章の前後関係については、十二章から十四章までは霊の賜物と教会の稜序(エクレシア)のことが述べられている。最高の震の賜物として十三章の愛が述べられているが、パウロはコリントの教会のいろいろな問題の解決として、惨憺たる人間のエクレンシア、コリントのエクレンシアの問題解決としてこの章で「愛」を奨めていると思う。十三章(の愛)はよくその前後関係から切り離して扱われがちであるが、そうではない。パウロは人間の惨憺たるエクレンシアの問題解決としてこの章で「愛」

を奨めていると解すれば、この章の「愛の讃歌」の意義は一層深化し、また愛の讃歌は一層高らかに鳴り響くであろう。このことがこの拙論の結論である。

(三) 愛についての聖書中の他の箇所は、一々あげるときりがなく、旧新約聖書全体が神から人類への愛の手紙、書物である故、代表的箇所だけを記す。「序」にあげた共観福音書の、キリストの律法学者に答えられた第一・第二の誠命の箇所、その旧約の出典、申命記六・五、一〇・一二、三〇・六、レビ記一九・一八。ヨハネ福音書の「互に愛せよ」の箇所一五・一二―一七。「愛は律法の完全なり」の箇所ロマ書一三・八―一〇。第一ヨハネの「愛の讃歌」ともいふべき四・七―二一等である。

(四) 愛といくつかの神学的問題との関係につき述べた。三の(一)で述べたように、内村のごとき回心の実験をした者は、愛は聖震の賜物ということになり、自と「信仰と行為」が一致することになる。聖震の働きの下、キリストの十字架により罪赦された者、義と認められた者は、喜んで神の誠命を守ることになり、即ち愛を實踐することになり、聖い生活、聖化が起こる。「義認と聖化」の一致が起こる。また愛は神の恵みの出来事であり、「二三人の間に愛が現実となるとき、始めて伝道も

真に現実となるのである」(関根正雄著「宗教革命の論理」一四三頁)。また内村のごとき回心、新生の実験は神の歴史における出来事であり、愛の実践もまたそうであり、信仰義認論と救済史は愛において統一されると言い得よう。

(五) 愛のことを述べている諸書につき言及したい。学生時代、アリストテレスの「ニコマコス倫理学」の演習で $\phi\iota\lambda\alpha$ (友愛)につき学んだが、これは非常に価値ある徳であるが、人間の側のもであり、神の側のものである $\alpha\gamma\alpha\pi\eta$ とははつきり異なる。(当時教授された須田豊太郎先生は、広島原爆等より「人類は自分のくびをしめようとしている。」と教回言われたことを思い出す。あれから三十年以上経っているが、人類はますます核兵器の製造に狂奔しているのは真に嘆かわしい限りである。) ニーグレンの「エロースとアガペー」は、ルターのキリスト教的愛をよく握んでいたと思う。キルケゴールの「愛のわざ」は彼独特の優れた深いキリスト教的愛の考察であった。中村獅雄の「信・望・愛」(コリント前書第一三章の研究)は中村氏独特の比論と逆説による研究である。

参考文献

ARISTOTELIS ETHICA NICOMACHEA I. Bywater, 高

田三郎訳、ニコマコス倫理学、河出書房。

ニーグレン、エロースとアガペー、みすず書房。

キルケゴール、愛のわざ、白水社著作集、一五、一六。

中村獅雄著作集三、新教出版社。

資料、内村鑑三先生記念キリスト教講演集、昭和五、十八年（キリスト教夜間講座出版部）の中の昭和十七年の政池仁の講演。無教会キリスト教神学研究、第二四号、「愛について」、主筆泉治典。

おとずれ、第四八号、「マルコによる福音書第三章二〇～三五節」量 義治。

関根正雄、宗教革命の論理、弘文堂。著作集第二卷所収。

NTD 新約聖書註解七、コリント人への手紙、NTD 新約聖書註解刊行会。

希和对訳脚註つき新約聖書 VII a コリント人への手紙上、岩隈直訳註、山本書店。